

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成30年3月26日(第39号)

発行：島田療育センターはちおうじ

「いのちの授業」を行ってみて、まず浮かんだのは母のことでした。母の死はあまりにも突然でした。感謝の言葉を伝える機会もないまま、天国に逝ってしまいました。

「いのちの授業」で一番勉強させてもらったのは私だったのかもしれませんが。

平成24年4月に旅立っていった我が母のことを紹介します。

所長 小沢 浩

(1) 日本へ

母の骨は小さかった。あまりに小さかった。

母は満州大連で生まれた。祖父は技術者で客船の設計をしていた。しばらくして満州鉄道から誘いがあり、撫順に移った。生活は裕福であった。女中を2人雇い、それはとても大きな家だった。姉が女学校を出て教師をしていたため、姉妹の中で医者がいてもいいと母は新しくできる女子医科大学に入学する予定だった。だが女学校を卒業する年に終戦を迎えた。それからは地獄であった。外へ出ると今まで虐げられていた中国人が日本人を殺したりしていたため、外に出ることができない。食べ物も手に入れることができない。そのときに助けてくれたのが、使用人として働いていた中国人であった。日本人を助けていることがわ

かると自分自身の身も危なくなる状況の中、その中国人は夜中になるといつも裏口に食べ物を置いてくれた。でもお互い会うことはなかった。

しばらくするとロシア兵がやってきた。ロシア兵は、家に押しかけるとあるものを何でも奪ってしまう。何をされるかわからなかった。そのためロシア兵が来ると、床下に子どもたちと祖母を隠し、祖父が床の上に座っていた。しばらくしてあるロシア兵が家に



住み込むようになった。そのロシア兵は優しくった。何も危害を加えない。昼にロシア兵が押しかけて物を盗んでいったときに、その様子を詳しく聞く。数日すると盗まれたものが戻ってくるようになった。その後盗みはなくなった。

ついに満州から日本に帰る知らせが届いた。早く日本に帰りたい。でも、日本の地を踏むまでは地獄であった。

まず、貨物列車に乗せられ新京の収容所に入った。収容所に詰められた日本人。収容所では、座る場所を確保するのがやっと。食べ物もない。衛生状態も悪い中、そこで発疹チフスが流行り、多くの日本人が死んだ。教師をしていた姉もそのときに死んでしまった。母は、祖父が声を出し泣いている姿を初めてみた。その姿が忘れられなかった。

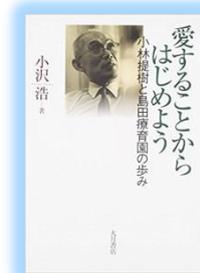
1年ほどたった頃、葫蘆（ころ）島に移動し船に乗った。やっと日本に帰ることができる。喜びもつかの間、大勢の乗る船にのったら食べ物は更になくなった。初めて麦飯を食べた。しだいに麦飯もなくなる。水もない。船でも地獄は続いた。

そんな中、何とか日本にたどりつくことができた。やっと踏むことができた日本の地。辛くて長い遠い道のりであった。



『奇跡がくれた宝物』
小沢浩 著

クリエイツかもがわ
より、好評発売中



『愛することからはじめよう』
小沢浩 著

大月書店
より、好評発売中